

M02a Solar-C_EUVST : データ利用・運用と科学成果創出へ向けた体制構築

鳥海 森, 清水敏文, 川手朋子, 松崎恵一 (宇宙航空研究開発機構), 今田晋亮 (名古屋大学), 一本 潔, 浅井 歩 (京都大学), 末松芳法, 原 弘久, 勝川行雄, 久保雅仁, 渡邊鉄哉 (国立天文台), 横山央明 (東京大学), ほか Solar-C ワーキンググループ

本講演では、2020年代中盤の打ち上げを目指して検討が進む次期太陽観測衛星「Solar-C_EUVST」におけるデータ利用・運用案を概観し、科学成果創出へ向けた体制構築の試みを紹介する。Solar-C_EUVSTの科学目標は、(1) 太陽大気や太陽風を形成するメカニズムの理解と、(2) 大気が不安定化し太陽フレアを駆動する機構の理解である。EUVST科学チームは、これらの科学目標を確実に達成するためコア観測プランを設定するとともに、世界の研究者から観測プロポーザルを受け付け、コア観測と提案観測のバランスを確保した運用を行う。サイエンスワーキンググループ (SWG) が運用と科学活動をレビューし、EUVST科学チームへガイドラインとアドバイスを提供する。また、実際の科学運用は、EUVST科学チーム内部の主任観測者 (Chief Observer) が実施する。衛星の取得データは、日本や各国の地上局を経由して宇宙科学研究所のテレメトリデータベース (SIRIUS) に集約され、データアーカイブシステム (DARTS) より配信される。名古屋大学宇宙地球環境研究所に設置される Solar-C サイエンスセンターは、観測データのキャリブレーションや解析ツールの配布を行い、他大学・研究機関の協力を得て地上観測データとの位置合わせや数値シミュレーションデータの提供も想定している。これらの観測データは原則として公開される予定である。科学目標 (1)(2) とも太陽表面磁場情報との精緻な比較が望まれる課題が含まれており、主要地上望遠鏡の担当者と密な協議を通じて、協調観測を実施する体制を築く。これらの科学運用の枠組みは、今後組織されるミッション運用・データ解析ワーキング (MO&DA WG) よって議論、構築される。